

# 昭君

禪竹作

前

ワキ 里人

シテ（父） 白桃

ツレ（母） 王母

後

ツレ 王昭君

シテ 单于

地は 唐土

季は 春

ワキ詞

「是は唐かうほの里に住居する者にて候。さても此所に白桃王母と申す夫婦の候ふが。一人の息女を持つ。其名を昭君と名づく。帝に召されて御寵愛限りなかりし所に。さる子細あつて胡国へ移されて候。夫婦の人の歎きたゞ世の常ならず。近所の事に候ふ程に。立ち越えとぶらはゞやと思ひ候。

シテ、ツレ一声

「散りかゝる。花の木陰に立ち寄れば。空に知られぬ雪ぞ降る。

シテサシ

「是は唐かうほの里に住居する。白桃王母と申す。

二人

「夫婦の者にて候ふなり。

ツレ

「かほどに賤しき身なれども。美名を顕はす娘あり。

二人

「昭君と彼を名づけつゝ。容顔人に勝れたり。されば帝都に召されて後。明妃と其名を改めて。天子にまみえおはします。

シテ

「かほどいみじき身なれども。猶も前世の宿縁。離

れやらざる故やらん。

二人「諸人の中に撰ばれて。胡国の民に移され。漢宮万里の外にして。見馴れぬ方の旅の空。思ひやるこそ悲しけれ。

シテ「されども供奉の官人ども。旅行の道の慰めに。絃管の数を奏しつゝ。

二人「馬上に琵琶を弾く事も。此時よりと聞く物を。

下歌地「画図にうつせる面影も。今こそ思ひ知られたれ。

上歌「彼昭君の黛は。く。緑の色に匂ひしも。春や暮るらん糸柳の。思ひ乱るゝ折毎に。風もろともに立ち寄りて。木陰の塵を掃はん。く。

シテ「いざく庭を清めんと。祖父は箒を携へたり。  
ツレ「実にや心も昔の春。老の姿もさゝがにの。いと苦しとは思へども。風結ぶ涙の袖の玉襷。斯かる思ひも子故なり。

シテ「唯世の常の賤の男と。人もや見るらん恥かしや。

ツレ 「日は山の端に入相の。

シテ 「兼ねて知らする夕嵐。

ツレ 「袖寒しとは思へども。

シテ 「子の為なれば。

ツレ 「寒からず。

二人次第 「落葉の積る木陰にや。 嵐も塵となりぬらん。

下歌地 「落葉の積る木陰にや。 く。 嵐も塵となりぬらん。

上歌 「実に世の中に憂き事の。 く。 心に懸かる塵の身

は。 掃ひもあへぬ袖の露。 涙の数や積るらん。 風

に散り。 水には浮ぶ落葉をも。 暫し袖に宿さん。

下歌 「涙の露の月の影。 それかと見ればさもあらで。 小

篠の上の玉霰。 音もさだかに聞えず。

シテ詞 「余りに苦しう候ふ程に。 休まばやと思ひ候。

ワキ詞 「いかに此屋の内に白桃の渡り候ふか。

シテ 「誰にて御入り候ふぞ。

ワキ 「いや某が参りて候。

シテ「此方へ御出で候へ。

ワキ「如何に申し候。さても昭君の御事御心中察し申して候。

シテ「御とぶらひ有難う候。

ワキ「又申すべき事の候。此柳の木の本を立ち去らずして清め給ふは。何と申したる御事にて候ふぞ。

シテ「昭君胡国へ移されし時。此柳を植ゑ置き。我胡国にて空しくなれば。此柳も枯れうずると申しつる

が。御覧候へ早片枝の枯れて候。

ワキ「実にく御歎き尤にて候。さてく昭君は何しに胡国へは移され給ひ候ふぞ。

シテクリ「さても昭君胡国に移されし。其いにしへを尋ぬるに。

地「天下を治めし始めなり。

シテサシ「然れば胡国の軍強うして。従ふ事期し難し。

地「されば互に和睦して。其しるし一つなからんやと

て。美人を一人遣はすべき。御約束の有りしに。

クセ「そも漢王の宣旨には。三千人の寵愛。何れを分くる方もなし。もろくの宮女の。紅色高位の姿を。賢聖の障子に。似せ画に是を顕はし。中に劣れる様あらば。即ち彼を撰びて。胡国のために遣はし。天下の運を静めんと。綸言ならせ給へば。数々の宮女たち。是を如何にと悲しみ。画かける人を語らひ。皆賂を贈りつゝ。御約束の有りし故。

シテ「されば写せる其姿。

地「何れを見るも妙にして。柳髪風にたをやかに。桃顔露を含んで。色猶深き姿なり。中にも昭君は。ならぶ方なき美人にて。帝の覚えたりしなり。それを頼める故やらん。たゞ打ち解けて有りしに。画図に写せる面影の。あまり賤しく見えしかば。さこそは寵愛。甚しゝとは申せども。君子に私の。言葉なしと思しけん。力なくして昭君を。胡国

に贈り遣はさる。

シテ詞

「昔し桃葉といひし人。仙女と契浅からざりしに。  
仙女空しくなりて後。桃の花を鏡に写せば。即ち  
仙女の姿見えけるとなり。此柳もさながら昭君の  
姿。いざさせ給へ鏡に写して影を見ん。

ツレ

「それは仙女の姿なり。いかで是には喩ふべき。

シテ

「いやそれのみならず鏡には。恋しき人の写るなり。

ツレ

「夢の姿を写しゝは。

シテ

「しんやうが持ちし増鏡。

ツレ

「故郷を鏡に写しゝは。

シテ

「とけつといひし旅人なり。

ツレ

「それは昔に年を経て。

シテ

「花の鏡となる水は。

地

「散りかゝる花や曇るらん。思はいとゞ増鏡。若も  
姿を見るやと。鏡に向つて泣き居たり。く。 (中入)

昭君

「是は胡国に移されし。王昭君の幽霊なり。さても

父母別れを悲しみ。春の柳の木の本に。泣き悲しみ給ふ痛はしさよ。急ぎ鏡に影を写し。父母に姿を見え申さん。春の夜の。朧月夜に頭はれて。

地「曇りながらも影見えん。

ツレ「恐ろしや鬼とやいはん面影の。身の毛もよだつばかりなり。いかなる人にてましませば。鏡には写り給ふらん。

後ジテ「是は胡国の夷の大将。呼韓邪单于が幽霊なり。

ツレ「胡国の夷は人間なり。今見る姿は人ならず。目には見ねども音に聞く。冥途の鬼か恐ろしや。

シテ「呼韓邪单于も空しくなる。同じく昭君が父母に。対面の為に来りたり。

ツレ「よしなかりける対面かな。姿を見るも恐ろしや。

シテ詞「そも恐るべき謂はいかに。

ツレ「心に知らぬ我姿。鏡に寄りて見給へとよ。

シテ「いで／＼鏡に影を写さん。誠に気疎き姿かと。鏡



に立ち寄りよくく見れば。恐れ給ふもあら道理  
や。

地 「荊棘をいたゞく髪筋は。く。

シテ 「主を離れて空に立ち。

地 「元結さらに溜らねば。

シテ 「さねかつらにて結び下げ。

地 「耳には鎖を下げたれば。

シテ 「鬼神と見給ふ。

地 「姿も恥かし。鏡に寄り添ひ立つても居ても。鬼と

は見れども人とは見えず。其身かあらぬか我なら  
ば。恐ろしかりける顔つきかな。面目なしとて立  
ち帰る。

地 「唯昭君の黛は。く。柳の色に異ならず。罪を顕

はす浄玻璃は。それも隠れはよもあらじ。花かと  
見えて曇る日は。上の空なる物思ひ。影もほのか  
に三日月の。曇らぬ人の心こそ。誠を写す鏡なれ。

く。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第九輯』大和田建樹 著